

# JYC フォーラム 2018 年度事業報告

## 1 調査研究

### ① よい働き方研究会

支援現場に訪れる若者たちによって語られる“働きにくさ”や“働くことへの不安”とは何か。実ははっきりとしたことがわかっていないのではないかと、というのが本研究会のスタート地点でした。若者の声を聴くことから、なぜ働けないのか、そしてどんな働き方ならば働けるのかを考えていくことをコンセプトにしています。2018 年度は 2 回開催。こみっとプレイス(ワーカーズコープ)、DTP ユースラボ(協同ネット)の若者が参加し、仕事の現場の「呼吸のできなさ」や過去の経験からくる精神的不安定さが就職活動や仕事そのものに影響を及ぼしていることなどが語られました。研究者も複数参加し、若者の語りをさまざまな方向からサポートしています。この研究会が、若者が求める働き方を若者自身が追求・発信していくエンパワメントの内実を含む営みになっていかないと期待をしています。そのためには、より広い視野での出会いと学びを体験していくプロセスが必要です。

2019 年度初回の研究会は、既にこみっとプレイスを会場にして実施されました。より具体的な現場での実践を垣間見ながら進行される研究会は、若者が生み出そうとしているリアルな現場を肌で感じながら若者の語りを聞き取っていくことができます。次回は協同ネットを会場に実施する予定です。今後は、より広い範囲の若者が思いや願いを聴き取り合い、同じ時代を生きる仲間としての出会いを重ねながら、よい働き方を模索・発信していく起点になればと考えています。

### ② 社会的自立を支える学び研究会

#### ●目的

義務教育卒業後の社会への接続をどう支えるか、不登校のその後の進路はどうなっているのか、サポート校・広域通信制高校の現状はどうなっているのか、ヨーロッパの移行システムの現状、そもそも社会的自立を支える学びとはどのようなものとして捉えうるのか、これらの問いに答えるために、まず、それぞれの現場の現状を共有しつつ、そこでの課題を明らかにするとともに、「社会的自立を支える学び」の実相と方法を提示していく。

#### ●2018 年度の活動実績

第 1 回 2018 年 9 月 29 日

「現状認識についての共有」(JYC 会員からの問題提起)@早稲田大学

第 2 回 2019 年 1 月 5 日

「フリースクールについての報告」(東京シューレ 野村芳美氏)@早稲田大学

第 3 回 2019 年 3 月 24 日「通信制高校についての報告」(埼玉大学(非)土岐玲奈氏)

#### ●2019 年度の活動予定

第 4 回 2019 年 5 月 25 日「定時制高校が果たしてきた役割と現状」(平野和弘氏)@桶川市 響カフェ

第 5 回 2019 年 8 月 31 日「通信制高校の現場の実態」(石井さん、平山さん)@早稲田大学

その他、これまで子ども・若者の社会的自立を支えてきた取り組みに光をあて、これまでおこなわれてきたことと現状

を把握し、意見交換をして議論を深めつつ、社会的自立を支える学びを提起していくために必要なことを検討していきたい。具体的な実践内容としては、夜間中学や地域若者サポートステーション、学習支援などがあげられる。

### ③ 調査研究 WG サポステ

2019 年度地域若者サポートステーション事業に係る入札不調を契機に、多くの現場で、今後のサポステ事業の安定的実施とその質についての不安感が広がっている。JYC フォーラムとしては、内実を調査し、全国の協同実践をテーマに取り組み各団体に伝え、それぞれの意向を実施主体である厚生労働省や都道府県労働局に伝えるという運動体としての役割が課せられていると考えている。そこで、4 月に入り急遽サポステ担当部署の長である伊藤参事官との会合を申し入れ、身近なサポステ実施団体から現状認識と意見の徴収を経て、4 月 23 日に協同代表の佐藤、古村、理事の谷口が伊藤参事官と意見交換を行った。結果的には入札不調に関する実態の解明には至らなかったが、サポステ事業に関して、JYC フォーラムが一定の発言力と影響力を持っていると認められていることは間違いない。今後も所要所こした意見交換の機会を設けたり、参事官に JYC イベントの参加を要請したりすることで施策動向に刺激を与えていくことができるのではないかとの手ごたえを感じている。

### ④ 研究大会(7月21日@ワーカーズコープ)

7月に実施した第2回研究大会は、「若者支援はビジネスか？」というテーマを掲げ、100 名超の参加となった。最初は津富宏さんに基調講演をお願いし、委託事業をめぐる競争構造や評価問題などを題材にしながら、若者支援をはじめとする各種市民活動が進んでいくべき方向性が提起された。後半の分科会では、「学習支援」(中野謙作)・「就労支援」(西岡正次)・「ひきこもり支援」(森下徹)という3つの活動を取り上げ、それぞれの角度から大会テーマをより具体的に掘り下げていった。課題としては、津富さんへの基調講演の依頼と打ち合わせが十分に行なえず、想定していた内容とはやや違った話になってしまった点が挙げられる。また、基調講演・分科会ともに時間が短く、十分に議論・検討できる余地が少なかった。「研究会」としては、やはり議論・検討が大事な側面になるため、今後は時間配分・形態もきちんと検討していくべき課題である。

### ⑤ ファイザー調査

【取り組み概要】ファイザー助成を受けて、関西・関東・東北での合宿事業に参加した中堅実践者のうち、各地域5名、計 15 名に合宿前と合宿後で1名につき2回インタビューを実施した。合宿前は主に中堅実践者の日々の業務や葛藤など、合宿後は合宿の感想と求める研修について聞き取っている。

【達成したこと】合宿前インタビューでは、中堅実践者の経験している困難について、地域性も含めて聞き取ることができた。合宿後についても、合宿型研修についての具体的なフィードバックを得ることができた。

【課題】文字おこしたものを分析することができていない。

【2019 年度計画案】インタビュー分析会議: 直接2回実施、WEB2回

(分析の進み次第で)次年度の助成金(三菱?)へのエントリー

合宿前、合宿後のインタビューをそれぞれ分析することが必要である。そのため、ヒアリングチーム(阿比留、吉祥、原、岡部)を中心にして3回くらい集まる機会を持ち、まとめていくことが必要ではないか。

また、まとめた上で、実践者の状況については助成金を取り、正式に倫理審査も通して調査研究を進めることができないか。実践者の状況についての調査は 2011 年度「困難を有する子ども・若者の支援者調査」以来、実施されておらず、なんらかの調査を提出していくことが必要ではないか。

## ⑥ 各種イベント

### \*キックオフシンポ(4月3日@早稲田大学)

2年度目に入り、JYC フォーラムの活動を本格始動させていくための初発の契機として、4月3日にキックオフシンポジウムを開催した。参加者は120名ほどで、いわゆる「支援者」だけでなく、家族や当事者、研究者など多様な人びとが集まった。「“若者協同実践”ってなんだろう？」というテーマで、シンポジウムとグループトークを実施した。シンポジストは中村雄介(北芝)・竹久輝頭(京都ユース)・丸山康彦(ヒューマンスタジオ)の3名で、コーディネーターは原未来(滋賀県立大)。それぞれが取り組んでいる実践を語ってもらった上で、そこに含まれている協同実践の要素を掬いだし、「若者協同実践とは何か」を探っていった。後半では、7~8人ぐらいのグループに分かれ、参加者自身の問題関心やシンポを受けての感想、若者協同実践についての対話を行なった。

### \*関西シンポ(9月24日@立命館大学)

キックオフシンポの関西版として、9月24日に京都の立命館大学でシンポジウムを実施した。テーマは「「あてはめる支援」を超えて」と題し、適応主義的な支援を超えていく実践展開について考えるという内容とした。参加者は50名ほど。冒頭に、南出(事務局長)・古村(代表理事)より基調報告を行ない、「若者協同実践/JYC フォーラム」についての概要を提起した。後半では、泉翔(ウィークタイ)・中塚史行(NIRE)・岡部茜(大谷大学)の3者によるシンポジウムを実施した。「あてはめる支援」というテーマ設定・用語は大きな関心を呼び、SNSなどでも注目を集めていたが、京都ユースのイベントと重なってしまったことや、アクセスの悪さなどもあり、参加人数が伸びなかったことが反省点である。また、シアター形式の会場だったため、フロアとのやり取りが難しいという部分も課題として挙げられた。

## 2 情報発信

### ●情報発信・啓発事業

#### \*『月間社会教育』への連載寄稿

11月より、隔月で1年間の予定で『月間社会教育』誌上に若者協同実践のエッセイを掲載していくこととなった。第1回はJYC フォーラム自体について南出がまとめ、第2回は文化学習協同ネットワークの取り組みについて、高橋薫が記した。第3回は、依頼が間に合わなかったこともあり、南出の方で岐阜の仕事工房ポポロについて記した。第4回はワーカーズコープについて、扶藪にお願いし、既に入稿済みである。なお先方からは、もう1年継続できないかという依頼が来て、これを了承した。

#### \*発信・声明など

9月に起きた地震や台風の被害に対し、支援状況や義援金の案内など情報発信を行なった。また3月末に内閣府より発表された中高年ひきこもり実態調査の結果を受けて、代表理事によるコメントを声明として発表した。

その他、若者・ひきこもりにかかわって、さまざまなニュースや事件などが起きていたが(「民放各社における暴力的支援団体の放映についての共同声明」や杉田水脈の「生産性」発言など)、それらに対してJYC フォーラムとしてのコメントなどは出せていなかった。そのため、今後は代表理事間で迅速に対応していけるよう、体制を整えていく。

## ●NL、HP、SNS

・ニューズレターの発行

2018年4月(0号)、8月(1号)、12月(2号)目次をHPで公開

・ニューズレター発送システムの整備

これまで通常の電子メールで一斉送信していたニューズレターを、メールマガジン形式で一斉に送付する仕組みを作成中。合わせて協同実践交流会の案内など千単位のメール発信の仕組みも整備中。

今後の目標・・・定期刊行物の発行と読者会の各地開催

中期目標(案)

・NLの連載をまとめ、冊子として頒布する

・JYC関係者が雑誌、書籍等に執筆をした情報をまとめ、HP等に掲載していく

## 3 交流事業

### ① 中堅実践者対象交流合宿

2018年5月～関東・関西・東北の3地域で、各地約20名程度の交流合宿を行った。この取り組みは、団体の中で若手と代表者等をつなぐ役割を担ったり新人に団体の理念や仕事内容を教える役割を担う事を予想されるポジションです。一方、現場に責任を持つことが多いポジションのために団体の外に出る事が困難な状況がある事も聞きます。上記のポジションの実践者の団体を超える繋がりつくりのための取り組みとして、交流合宿を開催しました。内容は相互理解のワークショップ・その場で議論したい話題を取り上げるオープンスペーステクノロジー(改)などを実施しました。本年の成果としては合宿プログラム開発が出来たこと、各地でこういったプログラムのニーズがある実践者の顔が分かり次年度への礎石が出来たことが成果だといえる。

### ② 第14回あいち実践交流会

2019年2月9、10日に名古屋工業大学にて実施。

全体シンポジウムに始まり、分科会1日目は「知識と学び」2日目は「実践と交流」と位置づけ23分科会を実施。2017年11月に事務局会議、2018年5月に実行委員会を結成

#### 【達成】

組織として参加していなかった層(個人、少人数で市民活動に取り組んでいる方々など)の参加があった。動員なしで750名の参加、岐阜県層からの多くの参加・協力を得ることができJYCとのつながりがよりよくなった。ふくしま大会以降のリターン参加者が微増。

#### 【課題】

現地事務局がやりたかったこととJYCとしての方向性のずれが生じたため、運動としての実践交流会の位置づけが揺らいだ。そもそもこの大会が何を目指したもののなのか、議論をする前に動き出してしまうことは防ぎたい。